

二〇二二年度 京大現代文 共通【一】 解答モデルと採点基準

担当 中野 芳樹

〈一般的採点基準〉

- a 誤字・脱字・略字・表現未熟・文末表現ミス・文末句点なし等……マイナス1点。設問毎に減点
- b 未完成……失格
- c 解答欄の不正使用(二行書き、書き過ぎその他)……失格
- d 比喩表現のママなど……減点もしくは加減無し

〈設問別採点基準〉

問一 (10点)

山崎という実在の人間に語られた一言は、筆者に自身の心の持ち方を初めて気づかせて衝撃を与え、山崎という他者が筆者の内面に定着し、関係しつつその一部になったから。

*①は、必須ポイント

- ① 「それ」＝山崎深造の(君もくだなという)一言 1点
- ② ①は筆者を「ハッ」とさせた(置換＝「衝撃」) 1点
- ③ ①は自分、自分の心の持ち方を気づかせた 2点
- ④ ③は「生まれて初めて」である 1点
- ⑤ ①は生き身の(実在性をもつ)人間が語る 1点
- ⑥ 他人が「自分のうちへ」入ってきて定着し 2点
- ⑦ 他人が自分とつながりながら一部になる 2点

問二 (9点)

「おぼっちゃんだ」という一言により、筆者は山崎の友情と自己犠牲を少しも意に介さない無自覚な利己心に気づかされ、その無自覚を自分が悪であると思えてきたといふこと。

*②・⑤は、必須ポイント

- ① 山崎の(おぼっちゃんだという)一言によつて 1点
- ② 筆者にはく思えてきた 1点
- ③ 山崎の友情、払った犠牲を・少しも・気にしない 3点
- ④ ③の身勝手さ(利己)に・無邪気(無自覚) 2点
- ⑤ 無自覚を自分が「罪あること」(＝悪など) 2点

問三 (9点)

山崎の一言では、筆者は、過去に言われた、物質的・精神的な苦勞とは全く異なり、本質的な意味で人間の実在に触れ、その人間とつながることがなかつたと理解したといふこと。

*①は、必須ポイント

- ① 「今度は」＝山崎の(おぼっちゃんだという)一言は 1点
- ② 高等学校の頃などに言われた意味とは全く異なり 1点
- ③ ②は「物質的・精神的に苦痛を嘗めて」いないこと 2点
- ④ ①は本質的な意味で人間の実在に触れていない 2点
- ⑤ ①は④とのつながり(関係性)をもっていない 2点
- ⑥ 「知つた」の適切な置換 1点

問四 (12点)

忘れえぬ言葉は、書物では、筆者の特徴が次第に薄れ、抽象的な意味内容だけが自分の内面に混然と定着するが、実在の人間に語られた場合、その独立した他者と一体化し、実在的に内面に定着し、自分との実在的な人間関係を現わすから。

*②・③は、必須ポイント

- ① 忘れえぬ言葉について 1点
- ② 書物による場合は
 - a 筆者のマーク(特徴)が次第に薄れ 1点
 - b 抽象的な意味内容だけが自分の内に定着し 2点
 - c 「紛れ込む」(＝自分と混然となる) 1点
- ③ 実在の人間が語る場合は 1点
 - d 独立した他の人間と一体となり 2点
 - e 実在性をもって自分の内に定着し 2点
 - f 自分との人間関係が実在的に感じられる 2点

問五 (10点)

忘れえぬ言葉を語つた実在の他者が、言葉と一体になって自分の内面に実在的に定着する本当の人間関係では、時を経てその言葉を想起する毎にますます他者は実感を増し、現実の生者と関係より、一層実在的に感じられるから。

*③・⑤は、必須ポイント

- ① 忘れえぬ言葉を生きた他者から語られると 1点
- ② 他者は言葉と一体化し・自分の内面に実在的に定着 4点
- ③ 本当の人間関係は、①・②の場合である 1点
- ④ 時間とともに言葉を想起するたび実感を増す 2点
- ⑤ ③は現実(の生きている他者)より一層実在的 2点